



日本混合研究法学会第2回年次大会 総括

大会長 尾島 俊之

実行委員長 野崎 真奈美



2016年8月27-28日に、東邦大学看護学部を会場として、日本混合研究法学会（JSMMR）第2回年次大会が開催されました。会場となった大学は町工場が点在する下町にあります。ちょうど公開された映画「シン・ゴジラ」でゴジラが最初に上陸・大暴れすることで話題になった場所です。東邦大学医療センター大森病院に医学部と看護学部が併設されていて、時折、救急車のサイレンが鳴り響くキャンパスです。

混合研究法の考え方そのものは長い歴史を有しますが、この学会は生まれたばかりのよちよち歩きです。そこで、今回のメインテーマを『混合研究法への誘いー多様性からの創発』とし、昨年に引き続き「誘い」を強調するとともに、新たに「多様性」を副題に加えることによって、さらなる一步を踏み出すきっかけとさせていただきます。招待講演は「EBM（根拠に基づく医療）とNBM（物語りと対話に基づく医療）の統合的理解-実践と研究」と題して斎藤清二特別招聘教授（立命館大学総合心理学部）に、特別講演は「日本における混合研究法コミュニティの創生と未来」と題して抱井尚子教授（青山学院大学国際政治経済学部、日本混合研究法学会理事長）に、学会プレ企画として「混合型研究論文査読セミナー」をマイク・D・フェターズ教授（ミシガン大学家庭医療学講座、Journal of Mixed Methods Research 共同編集委員長）にお願いしました。また、オープンフォーラム・パネル討議2件、口頭発表12件、ポスター発表13件、出版社・企業展示5件が行われました。

今大会は国内での単独開催でしたが160人（招聘者、事務局を含む）が集まりました。いろいろなバックグラウンドの方に参加していただき、

また、混合研究法に対してもさまざまな考え方が述べられ、今回のメインテーマの通り、多様性があるなかでの和気藹々としたやりとりが行われました。

最後に、今大会で講演・発表された方々、活発に意見交換された方々、企画・査読・広報・運営においてご尽力いただいた運営委員の先生方、ホスピタリティを発揮して大会を支えた事務局の皆様、厚く御礼申し上げます。皆様と共に今大会を成し遂げ、次回にバトンを渡せたことを誇りに思います。会員・参加者の熱気がミックスされ、今後益々発展していくことを実感した大会でした。



大会終了後 メイン会場にて

文責： 尾島 俊之
浜松医科大学健康社会医学講座 教授
日本混合研究法学会 副理事長

野崎 真奈美
東邦大学看護学部 教授
日本混合研究法学会 理事

日本混合研究法学会第2回年次大会

大会プレ企画参加報告

プレ企画セミナー：
「混合型研究論文査読セミナー」
“How to Evaluate Mixed Methods Studies”

講師：マイク・D・フェターズ
Michael D. Fetters
ミシガン大学家庭医療学講座教授
Journal of Mixed Methods Research
共同編集委員長



昨年の「混合研究法入門」に引き続き、今年もマイク・フェターズ先生のセミナーを受講させていただきました。今年は「混合型研究論文査読セミナー」という一歩も二歩も前に進んだタイトルで、ついていけるのかという緊張感の中でのスタートとなりました。しかし、昨年のワークショップで知り合った方々と今年も再会するという嬉しい出来事が、私の緊張を少しほぐしてくれました。

続いて「Activityだからね。どんどん汗をかこう！汗をかいてWorkしてワクワクしよう！」というテンガロンハットをかぶったマイク先生のことばで、ドキドキはワクワクに変わりました。セミナーでは、混合研究法は生活の中に多々あるが、今までは別々に考えていたこと、近年やっと一緒に考えられるようになり、方法論が議論されるようになったとの話がありました。私は普段テキストマイニングの手法を用いて研究しています。質的データを統計学的に分析することはこれまで困難だと言われてきましたが、テキストマイニングの手法を用いることで分析するだけでなく、両者を同時に視覚的に示すことも可能になりました。この点において、混合型研究法とテキストマイニングの共通性や、研究に取り入れる際のヒントが多く存在するようになって感じています。

1+1=2になるのではなく、3にも4にもなると

いうことの説明がされました。そのためにもきちんとした手続きを使用し、矛盾する場合は考え直す、そして質データと量データを別々に扱うのではなく、意図的に統合する重要性をととてもよく理解できました。

混合研究法の説明の後、査読プロセスのアクティビティをしました。すでに公表された混合研究法に関する論文の中から、混合型研究の主要な構成要素を複数人で協力をして探しました。普段読むものとは異なった分野の英語論文ということもあり苦戦する部分もありましたが、私たちが担当した「量的および質的研究の両方で厳密なデータ収集法や分析法が用いられた証拠」を無事見つけることができました。

「抱井先生はこれから日本混合研究法学会での査読者を育成していきたいんだよ」というマイク先生のことばにはみんな苦笑いでしたが、査読コメントの出し方、査読をする際のコツなども伝授していただきました。

統合のタイミングや結果の示し方など、普段難しいと思うこともまだまだ多い混合研究法ですが、どのような論文が求められ、混合研究法として認められるのか、査読者の視点から学ぶことができ、とても良い機会となりました。今後ワクワクする機会にまた出会えることを期待しています。

報告者：

大河原 知嘉子
東京医科歯科大学大学院保健衛生学研究科 助手

日本混合研究法学会第2回年次大会

基調講演

基調講演：
「日本における混合研究法コミュニティの創生と未来」

演者：抱井 尚子
青山学院大学国際政治経済学部
国際コミュニケーション学科 教授
日本混合研究法学会 理事長



この基調講演では、日本の混合研究法 (MMR) コミュニティのこれまでを振り返り、今後このコミュニティが目指すべき方向について展望した。まず冒頭で、国際混合研究法学会 (MMIRA) の第2回大会 (2016年8月、英国ダーラムで開催) の基調講演におけるSandelowski教授からの問題提起 (統一的な方法論や概念に固執することへの疑問) を紹介した。

その後、日本混合研究法学会 (JSMMR) を中心としたMMRコミュニティの経緯と、今後の展望についてお話しをさせていただいた。ここでカバーした主な話題は、(1) 日本混合研究法学会 (JSMMR) の1年の軌跡の振り返り、(2) 学会創立記念書籍としての『混合研究法への誘い—量的・質的研究を統合する新しい実践研究アプローチ』(遠見書房)の執筆・編集作業の中で顕在化してきた課題とそれらの検討、そして(3) 向こう5年間で視野に展望したJSMMRが目指すべき方向性、である。

第一にJSMMRの1年の軌跡の振り返りである。JSMMRは、混合研究法という名を冠した日本で初めての学術団体として、国際混合研究法学会の第1回大会の翌年 (2015年4月) に誕生した。世界ではMMIRAに続き2番目の公式な混合研究法学会となる。また、2016年8月にはMMIRAの関連学会第1号として正式に登録された。このことは、

JSMMRが日本の混合研究法学会として世界からお墨付きを頂いたことを意味するとともに、MMIRAとの相互協力のもと混合研究法の普及と発展に尽力する立場にあることを示すこととなった。

第二にJSMMRの創立を記念し出版された『混合研究法への誘い』についてである。これは、2015年9月に開催された第1回日本混合研究法学会/国際混合研究法学会アジア地域会議の基調講演、招待講演、パネルディスカッション、ワークショップを収録した1冊である。本書の執筆・編集にあたり、混合研究法に関する用語の訳出がもつ揺らぎの問題が顕在化した。この問題を乗り越えるために、本書にはこれまで様々に翻訳されてきた用語の収斂を図る場としての役割が付与された。

(次頁につづく)



文責：

抱井 尚子
青山学院大学国際政治経済学部 国際コミュニケーション学科 教授

日本混合研究法学会第2回年次大会

基調講演

(前頁よりつづき) 用語の収斂に関しては、Mertensら (2016, January) によるMMIRAタスクフォース・メンバーの懸念や、冒頭で紹介したSandelowski教授からの問題提起など様々な議論がある。しかしながら、用語の未収斂は混乱をもたらす可能性もあり、少なくとも基本的な概念に関しては共通言語をもつことがコミュニティの成員間のコミュニケーションを円滑なものにする上で必要不可欠であるという考え方もできる。したがってJSMMRでは、本書の出版を通して、これまで揺らぎがあった基本的な用語の訳出を収斂させることを目指した。

第三にJSMMRの向こう5年間の展望である。質でもない量でもない、MMR独自の意義を理解するためには、70年代・80年代に起きたパラダイム論争という歴史的背景の理解が不可欠である。会員諸氏がMMR誕生の歴史的背景を理解した上で、MMRを理論的に検討し、研究実践を蓄積して行くことを支援するのが、JSMMRのこれからの主要なミッションとなるだろう。その過程において、MMIRAとの活発な交流の機会を作り、MMRの普及と発展に寄与して行くことができればと考える。また、

今後は、日本からも独自のMMRを世界に発信することができるようになることを期待したい。向こう5年間に取り組む具体的な活動としては、(1) さらに多くの分野の研究者への参加呼びかけ、(2) MMIRAとの共催による国際大会の開催、そして(3) 学会論文誌の発行、が挙げられる。日本のMMRコミュニティはまだ草創期にある。このコミュニティがさらに発展していくためには、JSMMRの個々の会員による研究の進展のみならず、会員同士による相互の協力や建設的な議論が不可欠である。日本のMMRコミュニティを共に育て、またその成果を世界に発信していく作業にご尽力いただければ幸甚である。



引用文献

Mertens, D. M., Bazeley, P., Bowleg, L., Fielding, N., Maxwell, J., Molina-Azorin, J. F., & Niglas, K. (2016, January). The Future of Mixed Methods: A Five Year Projection to 2020.
<http://mmira.wildapricot.org/resources/Documents/MIRA%20task%20force%20report%20Jan2016%20final.pdf> (情報取得 2016/10/31)

文責:

抱井 尚子
青山学院大学国際政治経済学部 国際コミュニケーション学科 教授

日本混合研究法学会第2回年次大会

MMR オープンフォーラム 参加報告

登壇者:

マイク D. フェターズ(ミシガン大学)

亀井 智子(聖路加国際大学)

八田 太一(京都大学)

抱井尚子(青山学院大学)



「日本においてMMRが熟成する場」として企画された本セッションは、参加者が登録時に提出した疑問点に、MMRの第一人者であり且つ本学会の理事会メンバーである方々が答え、更に会場からの意見も交え議論するかたちで進められた。参加者からの熱心な質問、登壇者からの的確な助言、そして異なる見解も受け入れ共有しようとする雰囲気は、事象を伝統的な枠組みを超えて多面的にとらえることを目的とする本学会ならではの長特長であり強みと言える。

参加者からの質問の一部は次のとおりである。

1. 大会の演題登録時に提出する抄録に、「混合研究法への示唆」についてどのような記述が求められているか。
2. 適切なデザインの選択方法。
3. 投稿論文の字数に限りがある。量的研究法で一本、質的研究法で一本とするのはありか。
4. 説明的順次デザインにおいて、インタビューの内容は量的調査結果に応じて変えたほうが良いのか。
5. 「質と量の統合」のエビデンスとしての基準はどのようなものか。

6. ケーススタディを用いた混合研究の具体例について。
7. 量的分析の後の質的分析の目的は何か。

意見交換に耳を傾けていると、道を究めるプロセスとして耳にする「守破離」を思い起こした。まずは基本（つまり、質的研究法、量的研究法、MMRの3つの基本デザイン）の会得（守）、己の研究課題の探究により適した方法の発見（破）、そして自由な発想でリサーチをデザインできる境地（無）。フェターズ先生が他のセッションで、「MMRの日本語の論文を探したが2本しか見つからなかった」と発言されていた。ということは、多くのメンバーがこれからの可能性を秘めた「守」の段階におられるということであろう。

MMRを用いて修士論文を執筆する予定であったが、量的研究のみで終わってしまった私は、質問紙調査で収集した量的、質的の2つのデータセットに再び向き合うための学びの場を求めて本学会会員に申し込んだ。複数の研究法から導かれた結果を統合的に解釈する「知の冒険」をメンバーとともに楽しみたいと思う。

報告者:

仲野 友子

国際教育交換協議会(CIEE)日本代表部 エグゼクティブアドバイザー
青山学院大学 非常勤講師

日本混合研究法学会第2回年次大会

ポスターセッション 参加報告



8月28日午後、「これよりポスターセッションを始めます」の座長の呼びかけで、70名程であったろうか、参加者の視線がぐっとポスターに集まった。今回のセッションでは、一演題あたり1分間のアピールタイムが設けられた。発表者は、自己紹介に続き、関心領域・テーマ、研究の目的、デザイン、オーディエンスとディスカッションしたいことを述べる。13名の発表者が、すでに終えた研究の創意工夫点や現在取り組んでいる研究で助言を求めたい点について思い思いに話す。十人十色の研究の視点・研究手法ではあるが、デザインや研究方法に何らかの共通点があり、興味深かった。オーディエンスからは称賛の声、共感の頷き、励ましの眼差しが寄せられた。その後、各ポスター前で、発表者からより詳細な研究の説明があり、オーディエンスとの議論で会場内の熱気はさらにみなぎった。筆者もポスター発表を行ったが、その中で「倫理審査の申請方法」について複数名から質問があった。研究対象者への倫理的配慮は質的・量的の各フェーズで十分に記述できるが、異なる研究方法を用いる時、一度に申請すべきか、また申請しても良いのかで気を揉んでいる研究者が少なからず存在することを確認できた。学術集会はこのような悩みを共有し、研究実施者がより良く混合研究法を理解し、説

明・実行できるようになるために必要な場である。今回の学術集会で、各参加者が自身の研究をより実効性あるものに近づけ、ともすれば倫理審査委員会までも混合研究法へ誘うことができたならと、我が国における混合研究法の発展を願わずにはいられない。



ワークショップ座長を務めた
眞壁幸子氏と藤崎万裕氏

報告者：

藤崎 万裕
東京大学高齢社会総合研究機構 特任助教

日本混合研究法学会第2回年次大会

招待講演【演者:齋藤 清二氏】参加報告

招待講演:
「EBMとNBMの統合的理解—実践と研究—」

演者:齋藤 清二
立命館大学総合心理学部
特別招聘教授



JSMR第2回年次大会招待講演では、「ナラエビ」で知られる齋藤清二先生（立命館大学特別招聘教授）の「EBMとNBMの統合的理解—実践と研究—」と題されたレクチャーを聴く機会に恵まれた。齋藤氏の話は、目覚ましい発展の中にあってもなお、医学／医療の不確実性問題については未解決であるという問題意識から、医学史、医学教育、研究方法論における多岐に渡る話題を取り上げ、異なるアプローチの「統合」へと議論を深めていく、示唆に富んだレクチャーであった。以下では、混合研究法コミュニティにとって重要と思われた2点について報告する。

1点目は医学／医療におけるエビデンスの位置づけについてである。Sacket (1996) が述べるように、エビデンス・ベイスド・メディスン

(EBM)とは「個々の患者へのケアについての臨床判断において、最新、最良のエビデンスを、良心的、明示的に、思慮深く用いること」である。にも関わらず、EBMは自動的に医行為の内容を決定するものだとするある種の誤解が蔓延してきた現状がある。Sacketの定義からも明らかであるように、臨床疫学的根拠、患者の意向、医療者の臨床能力、個別の臨床的文脈といった構成要素によって成り立つのが本来のEBMであり、それ自体が「統合」的实践の営みであることを、改めて聴衆は確認することができた。

2点目は、ナラティブ・ベイスド・メディスン (NBM; Greenhalgh, 1998) やナラティブ・メディスン (NM; Charon, 1996) の特徴と意義についてである。家庭医療学のTaylor (2010) が定義するNBMの特徴のうち最重要と思われるのは、

「患者と臨床家の対話から浮かび上がる新しい物語が、治療的な影響をもたらす可能性を認める」という点である。EBMを補完するような、医療者の「良好な関係性に参入する能力」を育成する教育について、ワークショップの実例から具体的な話題が提供された。

一方、研究においても、一般化可能性を志向する量的アプローチによる効果検証研究と、転用可能性を志向する質的アプローチによる臨床実践の質的改善研究が区別されるが、臨床研究においてはいずれも重要となることが取り上げられた。複雑なシステムを研究の対象とする事例研究についても物語科学の観点から言及されたが、あいにく時間が限られていたため、この議論については第3回年次大会において引き続き取り上げるべく準備委員会で企画中である。会員のみなさまには、是非ご期待頂きたい。

報告者:

成田 慶一
京都大学医学部附属病院 臨床研究総合センター
日本混合研究法学会 学会誌共同編集委員長

MMIRA 国際大会 2016

2016年8月3-5日 英国・ダーラム大学

大会テーマ：
線形モデルを超えて
—複雑性の時代における混合研究法の役割—
“Moving Beyond the Linear Model:
The Role of Mixed Methods Research in an
Age of Complexity”



MMIRA第2回英国ダーラム大会に参加するために、イギリス中部の小高い丘に建つダーラム大聖堂やダーラム城が美しい街を訪れ、3日間をMMRコミュニティと過ごしました。8月初旬というのに朝晩は肌寒いことには驚きました。

大会には、250を人名程の研究者が世界中から集まり、135の口頭発表、11のパネルディスカッション、5つのラウンドテーブルが行われました。加えて、5つのメンタリング・セッションは、全てのテーブルが一杯になるほど盛況で、さらにワークショップは、ジョン・クレスウェル、マイク・フェッターズ、バーク・ジョンソン、パット・ベイズリー、デビッド・モーガンといったMMRコミュニティの重鎮メンバーである先生方による12クラスが企画され、参加者は大いに勉強することができました。

大会を通して学んだ事は、MMR型研究を遂行するには、MMRの基本類型及び応用型に対する理解度を深めることと、一方で、研究対象となる事象やステークホルダー及び研究目的により、研究デザインに柔軟性を持たせざるおえないことでした。さらに、質・量データ収集の過程から統合を意識する点、ジョイント・ディスプレイを駆使する点など、データ収集の段階からMMRを司る要素を組み込みながら研究を進めることが、どのMMR研究デザインを用いるためにも必要であると感じました。



大学内の寮(宿泊先)



ダーラム城でのコンフェレンス・ディナー

報告者：

田島 千裕
恵泉女学園大学人文学部英語コミュニケーション学科 特任准教授
日本混合研究法学会 ニュースレター編集委員

MMIRA 国際大会 2016 2016年8月3-5日 英国・ダーラム大学

ワークショップ 参加報告

ワークショップ1:
「質的アプローチを用いた混合研究法研究」
“Qualitative Approaches to Conducting
Mixed Methods Research”
講師: シャーリーン・ヘッセ-バイバー
Sharlene Hesse-Biber
ボストン・カレッジ教授
Boston College, Sociology Department

ヘッセ-バイバー氏は質的研究者として混合研究法を奨励する、このワークショップの目的として次の3つを掲げていた。1) 混合研究法を見据えた質的アプローチの学び方を一つずつ提供する、2) 混合研究法デザインはどのようにして質的アプローチの目的を拡張させ、社会のありようを把握するかを理解する、そして、3) 研究者は何故どのようにしてその研究過程で混合研究法を採用するのかを理解する。ワークショップでは、一つ一つ研究事例を紹介しながら混合研究法と質的アプローチの関係について解説がなされていたが、それらは、ヘッセ-バイバー氏の手法と方法論の考え方に集約されるように思われた。つまり、手法は研究課題に答えるための道具である、質的手法と量的手法はいくつかの方法論の範囲の中で実行される、そして、方法論的視座には、本来、質や量といった区別はない。このような視座で混合研究法を捉えるヘッセ-バイバー氏は、研究デザインではなく研究課題に即したアプローチで混合研究法を用いることを強調し、同時に、混合研究法は必ずしも複雑な現象を対象としないとも言及していた。我々は現在、混合研究法を取り入れはじめた段階にある。このような考え方は、「完成された手法」として混合研究法を学びがちな我々にとって、思わぬ落とし穴であったりしないだろうか。



コンフェレンス中のヘッセ-バイバー氏



報告者:

八田 太一
京都大学 iPS細胞研究所上廣倫理研究部門上廣特定研究員
日本混合研究法学会 学会誌共同編集委員長

MMIRA 国際大会 2016 2016年8月3-5日 英国・ダーラム大学

ワークショップ 参加報告

ワークショップ2: 「ヘルスサイエンスの学術雑誌に混合型研究論文を出版する」

“Publishing mixed methods studies
in the health sciences literature”

講師: エリザベス・ラーソン

Elizabeth Larson

ウィスコンシン大学マジソン校准教授

University of Wisconsin-Madison

本ワークショップは、ヘルスサイエンスの査読ジャーナルに混合型研究論文を出版する上で有益となるアドバイスを提供するものであった。参加者は10名程おり、そのバックグラウンドは栄養学、医学、看護学、理学療法学、心理学など、多岐にわたっていた。ワークショップでは、まず、参加者全員がこれまでの論文出版経験や今後の出版計画について共有した。次に講師が、混合型研究論文を出版する上での戦略的な助言を提供した。それらは、(1) 混合型研究論文の投稿を受け付ける英文査読ジャーナルの紹介、(2) 信用性と競争性の高い原稿を書く方法、(3) 量的研究と質的研究の結果を効果的に提示する方法、そして(4) 修正原稿を送付する際の添え状の書き方である。ワークショップではインストラクターが提供する実例をもとに、論文の採択率を高めるための方法について具体的に学んだ。ワークショップの趣旨から、受講者は既に混合型研究実施経験をもっている者がほとんどであった。そのため、インストラクターから情報が提供されるのみならず、受講者同士が自身の経験にもとづくアドバイスを互いに提供し合い、主体的・協働的な学びの場となっていた点に本ワークショップの最大の特徴があったといえよう。



メイン会場

報告者:

抱井 尚子
青山学院大学国際政治経済学部 国際コミュニケーション学科 教授
日本混合研究法学会 理事長

MMIRA 国際大会 2016 2016年8月3-5日 英国・ダーラム大学

ワークショップ 参加報告

ワークショップ3:

「MMRにおける多様なデータ統合のための視覚化手法」

“Visualization Methods for Integrating Diverse Data in Mixed Methods Research”

講師: シャロン・ドチャーティ

Sharron Docherty

ディューク大学准教授

Duke University School of Nursing

講師: マーガレット・サンデロフスキー

Margarete Sandelowski

ノースカロライナ大学チャペルヒル教授

University of North Carolina – Chapel Hill

本ワークショップでは、多様で大規模なデータ、あるいはビッグデータを扱う混合研究法における「統合」のための視覚化手法について、最新の技術動向や研究事例に関する紹介が行われた。本ワークショップは3部構成であった。第1部では、サンデロフスキー教授によって、自身の基調講演を引き継ぐ形で、ビッグデータを扱う混合研究法においては視覚化手法による「統合」が重要であるという主張が展開された。第2部では、ドチャーティ教授およびサンデロフスキー教授によって、量的・質的データだけでなく、時間情報、地理情報などを含む多様なデータを視覚的に分析するための最新技術が紹介された。第3部では、視覚化手法にもとづき多様なデータを分析した混合研究法の実践例として、「幼児期の生命の危機に対する意思決定に関する研究」の事例が紹介された。両教授の主張によれば、視覚化手法によって、研究者はビッグデータを効率的に分析し、またオーディエンスに対して分析結果をわかりやすく提示することができる。さらに従来の手法では得るこ

とが困難であった新しい洞察を得ることができ、可能性が開かれる。ビッグデータ時代の混合研究法における「統合」という新しい考え方に触れることができた、非常に刺激的なワークショップであった。



大会・ワークショップ資料

報告者:

稲葉 光行

立命館大学政策科学部 教授

日本混合研究法学会 ウェブ委員

MMIRA 国際大会 2016 2016年8月3-5日 英国・ダーラム大学

ワークショップ 参加報告

ワークショップ4: 「混合研究法入門」 “Introduction to mixed methods”

講師: Anthony J. Onwuegbuzie
アンソニー・オンウェノブージー
Sam Houston State University
サムヒューストン州立大学教授

講師: Kathleen M. T. Collins
キャサリン・コリンズ
University of Arkansas
アーカンソー大学教授

This fast-paced workshop was packed with information. The main goal was an overview of the necessary background researchers might need to consider about mixed methods research from within their field. The content was mostly general and theoretical, and it focused on the kinds of knowledge, strategies, and techniques researchers need to conceive a project, and the types of considerations needed to bring such a project to successful fruition.

The workshop began with establishing the background to the research. To do this, Tony Onwuegbuzie used an overall map of the process, with links leading to further resources and points. As the process went on, even more nuanced distinctions (like the difference between theoretical and conceptual frameworks) become accessible and familiar. Tony, with the support of Kathleen Collins, answered questions coming from participants representing all fields, and they demonstrated extensive experience in the process.

Besides the wealth of detail, a large number of resources were made available from the organizers, from links to software (like GPower), practical ideas (like using coding software for your literature

review), and resources (like the PowerPoints for the presentation, mailed to the participants). In addition, the presenters provided, via drop box, a link to access published sources on various topics related to mixed methods research.

The strength of this session lay in detailing how to get the “plus one,” which is the goal of mixed methods research. This is what made the experience a satisfying one.



オンウェノブージー氏



コリンズ氏

報告者:

Myles Grogan
関西大学 特任講師

MMIRA 国際大会 2016 2016年8月3-5日 英国・ダーラム大学

ワークショップ2 参加報告

ワークショップ5:
「社会的公正を目指すツールとしての混合研究デザイン」
“Mixed Methods Design as a Tool to Enhance Social Justice”

講師: ドナ・マートンズ
ギャローデット大学名誉教授

Donna Mertens, University of Gallaudet University

本ワークショップは、女性、障がいを持つ人、人種的少数派、貧困に苦しむ人など、社会的弱者に焦点をあて、MMRを用いて彼らのニーズを代弁する研究者のために助言を与えることを目的としていた。

このように社会的弱者の状況を改善すること、つまり変革を志向する哲学を有するMMR研究の枠組みを、社会公正的デザインと呼ぶが、ワークショップでは、社会的公正デザインを実践する上で意識する必要がある要素が挙げられ、それぞれに対し説明が加えられた。それらは、1) 力関係に着目する、2) 差別や不公平の原因となっている要因を限定する、3) 実施されているプログラム等の効果や影響を測定する、4) 当事者に過程を振り返る機会を与える、5) 人権やジェンダーの公平性について理解が進むことを目指す等であった。

続いて、これらの要素を含む研究例として、ジェンダーの不平等に関する研究と、HIV予防プログラムに関する研究例が紹介された。

示された研究例の特徴としては、一つの研究プロジェクトが複数のステージから成っており、各ステージが説明的順次デザインや収斂的デザインであったりと、非常に複雑に構成されていることである。この研究哲学のもとに実施されるMMR研究は、複雑な構造を有す

るということが、一つの特徴といえそうである。



報告者:

田島 千裕
恵泉女学園大学人文学部英語コミュニケーション学科 特任准教授
日本混合研究法学会 ニュースレター編集委員

MMIRAの関連学会として承認されました

【MMIRAの関連学会として正式に承認】

昨年秋に、日本混合研究法学会が、MMIRAの関連学会として正式に認められたことをご知らせいたします。日本混合研究法学会は、唯一MMIRAの関連学会です。以下は、MMIRAのHPに記載されている内容です。

The screenshot shows the MMIRA website interface. At the top left is the MMIRA logo with the text 'Mixed Methods International Research Association'. To the right is a login form with the email 'hisako.aloha@gmail.com' and a password field. Below the login form is a navigation menu with items: Home, About, Membership, Events, Mixed Methods Resources, News, and MMIRA Affiliates (highlighted in orange). Below the navigation menu is a breadcrumb trail: Home > MMIRA Affiliates. The main content area is titled 'MMIRA Affiliate Groups' and contains the following text:

An affiliate is a group that extends MMIRA's mission in combination with a special interest. Affiliates coordinate their efforts separately, but refer to themselves and their activities as "MMIRA affiliated." MMIRA promotes communities of mixed methods researchers aligned to MMIRA's bylaws (Article I, Section 2). Affiliates bring together a variety of stakeholders interested in promoting mixed methods research through conferences and activities.

If your group would like to establish an affiliate membership with MMIRA, you may download the application by clicking here: [MMIRA Affiliate Membership Application](#).

MMIRA Affiliates

Japan Society for Mixed Methods Research: <http://www.jsmmr.org>

At the bottom of the page, there is a copyright notice '© MMIRA' and a footer 'Powered by Wild Apricot Membership Software'.

<http://mmira.wildapricot.org/page-1859607>



News Letter Summary

【News Letter Vol. 3】

This News Letter Volume 3 is a third issue of a biannual newsletter for JSMMR. In this volume, there are articles covering the second annual conference of JSMMR held in August (27-28) in Toho University, Omori Campus, and many covering the International MMIRA conference held in August (3-6) in Durham University.

The articles for the second annual conference of JSMMR include the following:

- Conference summary – pg. 1
- Participant's report of the pre conference seminar, "How to Evaluate Mixed Methods Studies" lectured by Dr. Michael D. Fetters – pg. 2
- Summary of a plenary speech, "The Creation and the Future of MMR Community in Japan" lectured by Dr. Hisako Kakai – pg. 3
- Participant's report of the MMR forum by Dr. Michael D. Fetters, Dr. Tomoko Kamei, Taichi Hatta MS, and Dr. Hisako Kakai – pg. 5
- Participant's report of the poster sessions – pg. 6
- Participant's report of the Invited lecture, "Integrated Comprehensibility of EBM (Evidence Based Medicine) and NBM (Narrative Based Medicine): Practice and Research" lectured by Dr. Seiji Saito – pg. 7

The articles for the International MMIRA conference include the following:

- Conference summary – pg. 8
- Participant's report of a workshop "Qualitative Approaches to Conducting Mixed Methods Research" lectured by Sharlene Hesse-Biber – pg. 9
- Participant's report of a workshop, "Publishing Mixed Methods Studies in the Health Sciences Literature", lectured by Dr. Elizabeth Larson - pg. 10
- Participant's report of a workshop, "Visualization Methods for Integrating Diverse Data in Mixed Methods Research" lectured by Drs. Sharron Docherty and Margarete Sandelowski – pg. 11
- Participant's report of a workshop, "Introduction to Mixed Methods" by Drs. Athony J. Onwuegbuzie and Kathleen M. T. Collins – pg. 12
- Participant's report of a workshop, "Mixed Methods Design as a Tool to Enhance Social Justice" lectured by Dr. Donna Mertens – pg. 13

次回年次大会のお知らせ

日本混合研究法学会第3回年次大会は、8月5～6日（4日：プレカンファレンス・ワークショップ）に、立命館大学大阪いばらきキャンパスで開催されます。今回は、MMIRAのアジア地域会議と共同開催の国際学会です。海外招聘者による、基調講演やミート・ザ・エキスパート、およびワークショップも企画されています。

演題募集は2月2日開始で、締切は4月15日です。皆様奮ってご応募ください。詳細は下記HPにて公開中です。

<http://www.jsmmr.org/conference/jsmmr2017>

大会運営委員募集

8月の大会運営委員を募集しています。当日のお手伝いなら可能という方、あるいは準備段階から携わってくださる方も募集します。ご連絡は下記までお願いします。

国際混合研究法学会アジア地域会議 事務局
Email: jsmmr.adm@gmail.com

事務局からのお知らせ

【会費】

会計年度は4月～翌年3月です。郵送にて会費請求書が届き次第、お早めにお振込みを願ひ致します。

【会員情報】

会員の基本情報（住所、勤務先など）が変更となった場合は、メールにて事務局まで届け出てください。

【メーリングリスト】

会員向けメーリングリストで案内を希望されるイベント（ワークショップや研究会など）がございましたら事務局までご連絡ください。

事務局Email: jsmmr.adm@gmail.com

編集後記

ニュースレター本号では、昨年東邦大学で開催された第2回年次大会の振り返りと、同じく昨年英国ダーラム大学で開催されたMMIRA大会の報告をお届け致しました。報告記事をお寄せくださった先生方に心よりお礼申し上げます。また、発行が遅れました事、お詫び申し上げます。

ニュースレター第4号は6か月後に発行予定です。掲載ご希望の記事がございましたら、下記事務局メールアドレスまでお送り頂けますようお願い申し上げます。記事は随時受け付けております。

それでは、8月に立命館大学大阪いばらきキャンパスで開催されますMMIRAアジア地域会議/JSMMR第3回年次大会にて皆さまとお会いできることを心待ちにしております。

NL記事宛先（事務局）：jsmmr.adm@gmail.com

ニュースレター編集委員：田島千裕

日本混合研究法学会

ニュースレター第3号

【発行日】2017年2月4日

【発行者】日本混合研究法学会

【理事長】抱井尚子・青山学院大学

【副理事長】尾島俊之・浜松医科大学

【理事】

福田美和子・東邦大学

八田太一・京都大学

稲葉光行・立命館大学

井上真智子・ハーバード大学

亀井智子・聖路加国際大学

成田慶一・京都大学

野崎真奈美・東邦大学

田島千裕・恵泉女学園大学

【事務局】

福田美和子・東邦大学